

地域学の「5つの視点」による授業の再構成

－ 2023年度「地域学入門」における試み －

竹内潔*・呉永鎬*・菰田レエ也*・杉村藍*

A Restructuring Based on Five Viewpoints: Introduction to Regional Sciences 2023

TAKEUCHI Kiyoshi, O Yongho, KOMODA Reeya, SUGIMURA Ai*

キーワード：地域学，5つの視点，客観的・構造的，生活，わたし，歴史的，移動

Key Words: Regional Sciences, Five Viewpoints, Objective and Structural, Life, Myself, Historical, Mobility

I. はじめに

(コーディネーター：竹内潔)

本稿は、本誌第20巻第1号で2022年度の「地域学入門」の授業実践について報告した(竹内他2023)のに引き続き、2023年度と同授業の実践について報告するものである¹。

前年度は「いのち」を一大テーマとしていたが、今年度は、一部の講師に引き続きご登壇頂く一方、これまでの地域学に関する研究・教育実践から見出された一つの到達点と考えられる「5つの視点」(客観的・構造的視点，生活の視点，〈わたし〉のくいま，ここからの視点，歴史的視点，移動の視点)(柳原2017a)から授業の再構成を試みた。

当然ながら、招聘する講師はいずれか特定の「視点」からのみ地域を見ているわけではない。そのため、各講師に対しては、講師と各「視点」の関係はあくまで企画者側による暫定的な分類である旨を断ったうえで、基本的にはありのままにお話しいただくよう依頼し、当該「視点」からの考察については、数回ごとに学内教員による講義を挟んで補うように構成した。

近年の授業構成では、初回と最終回以外はほぼ全てが学外講師による講演というオムニバス形式になっていた。そして、各講師の話す内容の地域学的な位置づけや解釈の多くを受講生自身に委ねていた。そのため、理解が不十分となっているのではないのかという反省があり、今回、上述のような構成とす

ることでこの点を改善しようと試みた。

また、15コマという時数の制約や5つの視点の内実や関連を考慮し、まず、「歴史的視点」と「移動の視点」を統合して「移動と歴史」の視点とし、「生活」「移動と歴史」「私」の3つのセクションを設けた。また、「客観的・構造的視点」は、実践者たる外部講師ではなく、学内教員による講義の回に組み込むこととした。

次頁に示したのが、以上の点を踏まえて構成し、実際に実施した講義計画である。ただし、第14回の堀西氏は「移動と歴史」のセクションの1回として、当初は第8回(6月7日)にご登壇いただく予定だったが、事情により同日の来鳥が叶わなくなり、日程を変更して実施した。

なお、以下の受講生・講師・教員の対話の仕組みは前年度をほぼ踏襲して実施した。

- (1) 講義時間中の質疑時間の確保
- (2) 講義内容を踏まえた「小テスト」の発問
- (3) コース担当教員による小テスト回答の抜粋
- (4) コーディネーターによる(3)の紹介
- (5) 小テスト全回答と(3)の講師へのフィードバック
- (6) コーディネーター・サブコーディネーターによる授業全体の振り返り(最終回)

以下、次節において各講義の概要とともに受講生によるコメント(小テスト回答)を紹介し、続く第3節で各コース担当教員による授業全体の振り返りを行う。

*鳥取大学地域学部地域学科

2023年度前期「地域学入門」講義計画（水曜2限・A20）			
1回	4月12日	オリエンテーション: 地域学とは何か、地域学の視点、講義の流れ	竹内潔、呉永鎬
2回	4月19日	「産み育てる」を地域で支える	生活 川口映子(産後ケア・やわらかい風代表)
3回	4月26日	生活をどのように発見し、伝えていくか	篠田洋祐 (NHKドキュメント72時間プロデューサー)
4回	5月10日	演劇のまち・豊岡ー現場からの報告ー	岩崎孔二(豊岡市民プラザ、NPO法人 Platz)
5回	5月17日	地域で看取るいのち	市原美穂 (一般社団法人全国ホームホスピス協会 理事長)
6回	5月24日	「生活から考える視点」を考える	竹川俊夫(地域創造コース教員)、呉永鎬(人間形成コース教員)
7回	5月31日	人と土の循環から考える地域	移動と歴史 鴨志田純(鴨志田農園)
8回	6月14日	鳥取と夜間中学[鳥取県立まなびの森学園]	山口京子(鳥取県教育委員会 県立夜間中学準備室室長)
9回	6月21日	鳥取県の人権教育の原点と鳥取県の部落史	福田和博(鳥取県立鳥取工業高等学校教員、全国人権教育研究協議会 副理事長)
10回	6月28日	「移動の視点」と「歴史の視点」を考える	アレクサンダー・ギンナン(国際地域文化コース教員)、 稲津秀樹(地域創造コース教員)
11回	7月5日	オドることは生きること。誰もが表現する社会と私	私 木野彩子(国際地域文化コース教員)
12回	7月12日	東アジアプロジェクトと私	藤縄望(鳥取市役所企画推進部文化交流課)
13回	7月19日	コミュニティのための「劇場」活動と私	中島諒人(演出家・鳥の劇場芸術監督)
14回	7月26日	出雲と移民ー足元から考える多文化共生	(移動と歴史) 堀西雅亮(島根県外国人地域サポーター)
15回	8月2日	まとめと振り返り、レポートについて	竹内潔、呉永鎬
<p>【レポート: 25点、提出期限: 後日アナウンス】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ レポートテーマ・提出方法・提出期限については、後日アナウンスします。 ・ 体裁: A4版横書・40字×40行程度・片面1枚。最初の3行に「タイトル」「コース・学生番号」「氏名」を記載。最後に参考文献や参考URLを記載すること。 <p>・ コーディネーター: 竹内潔、サブコーディネーター: 呉永鎬 ・ コース担当教員: 菰田レエ也 (地域創造)、呉永鎬 (人間形成)、杉村藍 (国際地域文化) ・ TA: 川上柁尚、田中万智 ・ 基本的な時間配分(90分): 前回のフィードバックと講師紹介(10分)、講師の講義(60~80分)、可能な限り質疑応答の時間を設ける(20分程度)。 ・ 出席票を兼ねた小テスト(5点×15回=75点)を毎回manabaで行います。回答の締切りは毎週水曜日17:00とします。4回以上欠席(未提出)の場合は未履修扱いとなります。</p>			

II 2023年度地域学入門の概要

(コーディネーター: 竹内潔)

本節では、各回の冒頭でコーディネーターが紹介した学生のコメントを中心に、授業(第2回から第14回)を振り返っていく。

(1) 川口映子さん(産後ケア・やわらかい風代表)

初回オリエンテーションに続く第2回(4月19日)は、外部講師1人目として前年度に引き続き産後ケア・やわらかい風の代表である川口映子さんをお招きした。「生み育てる」ことをテーマとした講義のため、「女性」との関係が深いお話だったが、男子学生からも次のようなコメントがあった。

「私は男ですが、子育ては自分には関係のないこととは思えないし、父親になったときに自分にできることを見つけるためにも、川口さんの活動は心強いと感じました。」(地域創造コース)

男性である自分に「できること」を見つけていきたいという姿勢は、妊娠出産において「できる／できない」にかかわらずすべてを引き受けざるを得ない状況に追い込まれる女性との違いを奇しくも露わにしているとも言えるが、「生み育てる」ことを自分ごととし、地域で支えるとはどういうことかを考える上での一歩を踏み出していることが窺える。

また、川口さんが学生時代から様々な行動を起こし、いまは鳥取市内で産前・産後ケアを専門とする拠点の運営で奮闘されているお話に対して、以下のようなコメントも寄せられた。

「私は誰かの居場所をつくることイコール、法人や団体を立ち上げて環境を整えてあげることだと考えていましたが、それだけではなく、自分も一人の人として人と向き合うことが最も重要なことなのではないかと気づかされました。」（人間形成コース）

「今年大学生になり、高校生の時と比べて自分の行動が自由に選択できるようになりました。何かをするもしないも自分次第なので、その分責任が伴うことも忘れず、後悔しないように、大好きな鳥取の役に立てるように、やりたいことにどんどんチャレンジしていこうと思います。」（国際地域文化コース）

大学入学間もない段階での講義だということもあり、大学生活での希望や意気込みが感じられるコメントであった。

(2) 篠田洋祐さん（NHK ドキュメント 72 時間プロデューサー）

4月26日の第3回講義は、NHKの番組である「ドキュメント 72 時間」のプロデューサーを務める篠田洋祐さんのお話を伺った。同番組は72時間の定点観測という独特の視点で世相を切り取るものだが、その制作者として大切にしていることなどが語られた。前回の川口さんに引き続き「生活の視点」のセッションに位置付けている本講義については、以下のようなコメントがあった。

「私は今回の篠田さんのお話と実際に動画を見たことで、「生活」とは、人が自分らしく生き、飾らず赴くままに生きることを感じることだと思った。…人間の“生”=生きること=生活なのではないかと思った。…前回の川口さんの居場所のはなしと合わせて考えてみたときに、誰かの居場所や心のよりどころをつくることができるのは人だけではなく、今回の自販機のように物や場所であることもあるのだと知った」（人間形成コース）

篠田さんのお話の中から「生活」の定義を自ら見

事に見出している。

また、番組によって浮かび上がる「価値」に注目した以下のようなコメントも見られた。

「価値とはどういったものに眠っているのか、その定義は何であるのかが気になりました。そこで一つ浮かんできたのが、自販機マニアの少年とそこのご家族が言っていたことです。取材班になぜこの自販機が好きなのかと聞かれたとき少年は、古くていいじゃないですかと答え、家族の方はこういう自販機は減ってきていると答えていました。つまり古くて少ないものには価値が付きやすいのかなと考えました。」（地域創造コース）

「今回の講義を通して“場所”というものについてとても考えさせられた。私は実際に番組を見て、“場所”はそれだけで多くの価値を持っているのだと感じた。」（国際地域文化コース）

「価値」については、初回オリエンテーションの際、竹内から「価値観を揺さぶるものとしての芸術」という話題、呉から大学における学問に向き合う姿勢として「事実の把握」と「価値の追求」の往還という話題を提供していた。「生活の視点」と併せ、教員が示す補助線を学生が巧みに活用していることが窺えるコメントである。

(3) 岩崎孔二（豊岡市民プラザ、NPO 法人 Platz）

5月10日の第4回講義は、豊岡市民プラザ館長であり、同館の指定管理者となっているNPO法人 Platz（プラッツ）の代表でもある岩崎孔二さんをお招きした。岩崎さんには、元豊岡市職員としての経験も踏まえながら、豊岡市民プラザの創設から現在までを中心に、豊岡市の様々な取組についてお話を伺った。これに対する学生のコメントとして、以下のようなものがあつた。

「私は、地域の魅力をアップさせたり、地域をより盛りあげたり、多くの人にきてもらうためには何か新しいものを作ったり、誘致するというすごい大きなことばかりを考えてしまい、小さな課題や、地域のすみずみまで目を向けるということを忘れてしまいがちになっている気がします。しかし、今回の講義を聞いて課題を解決した先に魅力になるものができたり、それが結果的に地域を盛り上げることに繋がることがあると感じました。」（地域創造コース）

「私も文化系の部活動で作品制作を行っていましたが、人が最も輝く瞬間は何かを生み出すとき、何かを創造するときだと感じます。だからこそ住民が表現活動を行える環境、そしてそれを人々に公開し認めてもらえる場があることは、魅力的なまちづくりに欠かせない要素だと思います。表現や創作の場がそのまま自分の居場所になり、活動を通して他人とのかかわりあいが生まれる。そんな場所が住み続けたいくなるまちなのだと思います。」
(人間形成コース)

「演劇含む文化芸術にあまり関心のない人もいるなかで、公金をそこに使うことの意義や、文化芸術が社会に与える影響をしっかりと説明していくことが大事だと思った。」(国際地域文化コース)

地域の課題を解決するとはどういうことか、そのための公金の扱い方とは、といったことを、お話にあった豊岡市における具体的な事例や自分自身の経験にも照らし合わせて考えられたことがわかる。

(4) 市原美穂さん(一般社団法人全国ホームホスピス協会理事長)

5月17日の第5回講義では、全国ホームホスピス協会理事長である市原美穂さんをお招きし、宮崎のホームホスピス「かあさんの家」の取り組みから、地域で看取るいのちについて考えた。市原さんは地域学入門に連続してご登壇いただいているが、毎回の新しい受講生たちに強い印象を残している。今年度の受講生のコメントとしては、以下のようなものがあつた。

「過去の講義では「どう生きていくか」について学習したが、今回は「どう死ぬか」という今までとは違った観点で学習した。

私自身が中学校3年生の時に祖父を亡くしたという経験と照らし合わせながら講義を聞いた。それと同時に私自身が高齢になり、死が近づいてきているときにどうするか、どうして欲しいかなどを考えながら受講した。私自身の経験から、私たち(家族)の考えと相手(亡くなる方)の考えは必ずしも一致しないことを私は知っていた。酸素を送り続けて、植物状態でもいいから生かしてやりたいという思い。もう十分、頑張った、今までありがとうと覚悟を決めている思い。本当に難しいし、誰かの言葉ひとつでどうにかなる問題ではない。

だが、今回の講義で改めてその問題について考えてみると、少し昔と考えが変わった気がした。昔、死は怖くて、通りたくない道。まだ先のことだと思いたいから、考えないようにしたい。そう思っていた。でも、死はいつか通る道。きちんと周りに見守ってもらえていれば、また最期の一ヶ月、一週間、一日、一時間を楽しく過ごすことができれば、死や別れは受け入れられるのではないかと考えた。これから地域の外へ出て、活動していくことがあると思うが、死という新たな観点も持つことも大切だと感じた。」(地域創造コース)

「人は人として生まれてきた以上私は、どんな人であっても死ぬ直前まで人として生きる権利を持っていると考えます。だから、最期のお願いとは“人として”最期を迎えたいというものだと考えました。では、人として生きるとは何か。これは人それぞれ意見が違ふと思います。」(人間形成コース)

「今親元を離れ一人暮らしをしているように何かあってもすぐに駆け付けることができないとき「かあさんの家」のような存在が助けになるのだと思う。地域の在り方はNPOの理念と同じ「公」でもなく「私」でもなく「共」なのかもしれない。死ぬ際に帰りたいと思える地域とはどういったものなのか、地域学を勉強していくうえで核心に迫るような問いであると思った。」(国際地域文化コース)

多くの受講生が「死」に向き合ったり考えたりした経験があるようで、その経験を引き合いに出したコメントが印象的であつた。そして、そのことが生きるということ、さらには「地域(学)」とも密接に関連するということを知る講義となつた。

(5) 竹川俊夫(地域創造コース教員)、呉永鎬(人間形成コース教員)

5月24日の第6回講義では、「生活」のセクションの小括として「構造的・客観的視点」の補足も視野に、竹川・呉の両教員による講義を行った。竹川からは、前回の市原さんによる「かあさんの家」の取り組みが「近代医学の限界」からうまれたものという視点が提供され、呉からも教育制度を含む「近代」の特徴などが語られた。前近代から近代化を経た現代において「生活」がどのように変化し、どのような問題が生じているのか、構造的に見るようによ促されたうえで、小テストでは、生活から地域を考

える視点の重要性を改めて述べるよう、発問された。これに対する学生からの回答としては以下のようなものがあった。

「私は、今までの講義を経てよい地域もよい生活も空間作りから始まるのではないかと考えました。」
(地域創造コース)

これは、それまでの外部講師の話題を「空間作り」という点から結び付け、「地域」と「生活」の関係を考えたものと言えるだろう。

「上手く言えないが、便利すぎる世の中を良い意味で不便にするために働きかけることが必要なのではないかという考え方に変わった」(人間形成コース)

「私が現時点で理想だと感じる地域のかたちは、まず変化していくものを、目の前の人の声を、すべて“ノイズ”として排除しない。そしてしっかりと耳を傾け、その声に寄り添い、誰もが安心して笑顔で過ごすことのできる地域をみんなで創り上げていく、というものです。そんな地域の姿があれば素敵だと思います」(人間形成コース)

「私は地域学入門の講義を受講する前、地域に対して役所が中心となって市民などがある程度の規則の下で暮らしている場所というイメージを持っていました。地域について考えるということは、正直私にとって難しいことでした。ですが何度か講義を重ねていくうちに地域は役所が中心となって営むだけでなく、住んでいる地域の住人と協力してより良い地域の営みが実現されていると感じるようになりました。」(国際地域文化コース)

これらは、教員らによる「近代」概念を自分なりに解釈して超克しようと試みていることが窺える。「便利／不便」「ノイズ」「役所」などは、まさに近代によって生まれたもの、顕在化したものと言えるだろう。これによって見落とされがちなものに目を向けるのに「生活」の視点を手掛かりとしたようだ。

(6) 鴨志田純さん(鴨志田農園)

5月31日の「移動と歴史」のセクションの最初となる第7回講義では、鴨志田農園の鴨志田純さんに「土と人の循環から考える地域」というテーマでお話を伺った。まず「土の循環(コンポスト、サー

キュラーエコノミーなど)のお話に対し、次のように自らの身近な地域での実践に結び付け、応用可能性について検討するものが見られた。

「鴨志田さんの講演を聞いて、大山町も生ごみ処理機に補助金を出していることを思い出した。…コンポストを通じたまちづくりができるポテンシャルを持っていると感じた。」(地域創造コース)

また、「人の循環」に関連して、次のようなコメントがあった。

「今回の講演では、モノや出来事、人のつながりについて、あらゆるところで強く意識させられたように思いました。」(人間形成コース)

「今回の講話の中では「異質な他者」との出会いが印象に残っています。SNSが広く普及していて、得る情報を自ら選択できてしまうこの世の中において、自分以外の多様な視点を取り入れることは自ら選択した情報のみで形成された価値観をいい意味で覆してくれると思います。」(人間形成コース)

さらに、鴨志田さんのこれまでの経験と姿勢に関して、以下のようなコメントも見られた。

「特に私が関心を持ったのは、海外一周の旅を行ったとおっしゃられた鴨志田さんの「問題を解決しようとしなくていい」という言葉です。…問題解決を急がずに、考え、そして自分の視野を広げること。また、解決できないと分かれば、それを超えるために何が必要か思考し補っていく姿勢を身につけていく事が今後何かに挑む際に必要になっていくのだと思えました。」(国際地域文化コース)

「問題解決」は、直接的・単線的になりがちだが、「解決しようとしなくていい」「解決を急がない」という向き合い方があるということは新鮮だったに違いない。

(7) 山口京子さん(鳥取県教育委員会 県立夜間中学準備室室長)

前の週の堀西氏の回が事情により休講となり、1週空けて第8回となった6月14日の講義では、鳥取県教育委員会から山口京子さんにお越しいただき、設立準備中の鳥取県立の夜間中学校についてお話を

伺った。学生からは以下のようなコメントがあった。

「私は小学校中学校に通っていた頃に不安や無気力で不登校、先生に怒られるので一応は遅刻ながら通学していた時期があり、今回の講義も当時を思い出しながら受けていた。」(地域創造コース)

「聞くだけ・知るだけでは夜間学校について真に理解することは困難である。ゆえに能動的に現場で学ぶ経験をする必要があると思う。」(人間形成コース)

「夜間中学の存在は知っていましたが、そこへ通う人々がどのような経緯、心持で学んでいるかはあまり強く意識してこなかったと反省しました。」(国際地域文化コース)

夜間中学が必要とされる背景、実際にどんな人が通うことになるのか、果たして、そこに自分(わたし)は何か関係があるのだろうか。身近なようで遠い、しかし無縁ではなさそうだという逡巡が窺えるコメント群であった。

(8) 福田和博(鳥取県立鳥取工業高等学校教員, 全国人権教育研究協議会副理事長)

6月12日の第9回講義では、県立高校の教員として勤めながら全国人権教育研究協議会副理事長をされている福田和博さんから「人権教育」に関するお話を伺った。受講生たちの多くは、何らかの形で「人権教育」を受けてきた経験があるようだ。

「差別のことを知らなければ意識してしまうことはなかったのかもしれないですが、「知らないことは罪である」とも言います。知っている方がよいのでしょうか?意識してしまうこと自体が問題なのかもしれません。…難しい問題ですが、考えていくことに意味があるのかなと思います。」(地域創造コース)

「今まで人権学習をしっかりと真面目に取り組んでいたのにどうして知らぬ間に差別しているのだろうと思った。学校等では差別はいけないことだと教えられるだけだと生徒も感じているので体で話を聞き、人権学習に本気で取り組もうという意識が薄れているのではないかと考えたが、それ以前に、単に他者の視点で問題を考えてしまっていることが一番の原因であると講義の中で改めて感

じた。」(人間形成コース)

「家族に部落差別のことについて聞いてみると、今住んでいる家を建てる前に不動産会社に「あそこは部落地区だからやめた方がいい」「ここは部落地区じゃないから大丈夫」と言われていたということを知った。結局我が家は部落地区ではないところに家を建て今もそこで暮らしている。それを知ったとき、知らなかったとはいえ自分のすぐ近くで差別が行われていたということに衝撃を受けた。また、現在も部落地区とされてきた場所がこうやって人づてに伝わっているということはとても怖いことだと感じた。三年ぶりに部落差別についての話を聞き、この当時の感情を鮮明に思い出すと同時に、この世の中に存在する「差別」とはそもそもなんなのか、自分は今まで差別をしてしまったことがあったのかを自身に問い直すきっかけとなった。…それらは本人たちに問題があるわけではなく、私自身の心持ちに問題があるのだと思った。「差別は差別者の恣意によるものであり、その対象は差別者が決める」という講義中の言葉は、まさにその通りだと感じた。」(国際地域文化コース)

「差別は差別者の恣意によるもの」という言葉は重く、自分自身の問題として考え続けなければならないと受け取った受講生が多かったようである。

(9) アレクサンダー・ギンナン(国際地域文化コース教員), 稲津秀樹(地域創造コース教員)

6月29日の第11回講義では、「移動と歴史」のセクションとして位置づけている堀西氏の回を第14回に残したまま、同セクションの小括となる講義をギンナン・稲津の両教員が行った。少々長くなるが、5つのコメントを紹介する。

「今回のセクションは私にとって遠い存在の話、気にかけることのなかった存在の話が多かったように感じる。それもあってあまりイメージすることができなかったのかもしれない。でも知るべき話であったと思う。」(地域創造コース)

「固定化し安定した場を大前提に考えること自体を問い直さなければならない」という言葉が授業内で出てきたが、まさに私は、固定化する楽さを優先し、「固定化された日本に生きる私」を変容する大変さから目を背けていたのだと思う。紹介さ

れた言葉の意味を考えながら、地域を見つめ、また地域と関わる、様々なルーツを持つ人と対話し、地域と自分の在り方を模索していく必要性を強く感じた。…地域は自分が行ったことのある範囲だけでなく、映像等で知ること、私の関わる地域の範囲が無限に広がる可能性があると感じた。同時に、その「感情」に支配されてしまう自分がいた。自分の想像する当事者像をつくり定型化してしまっていたため、動画の後の先生のお話で想像力の危険性についても知り、ハッとした。」(地域創造コース)

「今回の講義で特に印象深かったフレーズは、「出来事の歴史は、私たちの足元から想像され続けている。」です。震災という歴史は、震災を経験していない者にも想像されていて、それには体で感じることも含まれている。…震災の日に設けられる場所の力を通して、その場に私たちが立つことによって、その足元から想像されているという考え方に興味を持ちました。そして、場が開かれることによって、人びとの想像が共有され、後世に作られ、つながれていくということを学び、私も歴史を作っている一人であることを実感させられました。」(人間形成コース)

「本講義を終えて移動と歴史の交差点に佇むわたしの視点から地域の実態を探ることが大事なことだと考えた。私にとって地域とは偶然出逢った人らとつながりをもてる場という認識があった。」(人間形成コース)

「私は、ギンナン先生が「地域の中について知るために、地域外の人から聞く。」とおっしゃられたことが心に残りました。確かに、自分の地域を知るためには、一世代上の人に聞けばある程度はわかると思います。しかし、「地域」というのは、その「地域の外」があって生まれる概念でもあるため、地域を知るために地域内ばかりを研究するのはナンセンスだと納得しました。」(国際地域文化コース)

「ギンナン先生、稲津先生両氏の講義を聞いて、物、人、経験や記憶の移動には時間が大きく関わっていることに気付いた。」(国際地域文化コース)

移動する人、とどまらずに過ぎ去る時間などと向き合い続けている両教員から発せられる言葉が、そ

れまでの外部講師の実例と相まって、固定化された地域観を解きほぐし、「異質な他者」と邂逅しつつ歴史の当事者となる私という存在の自覚が芽生えていることが読み取れる。

(10) 木野彩子 (国際地域文化コース教員)

7月5日から、「私」のセクションに入った。第11回講義では、学内教員の木野が登壇した。まず、受講生のコメントを紹介しよう。

「どんな人の人生も「地域学」になる。どんな人の人生も「作品」になる。最後の言葉であったということもあるが、とてつもなく心に残りました。…自己表現の仕方は十人十色です。そのことを互いに理解しようとする社会を作っていかなければならないと思います。…ありふれたものではなく、一癖、二癖あるもののほうが、深く観覧者に落とし込まれていき、考えるきっかけになると思いますが、踏み込んだ表現によって、閉ざしていた心を開け放つきっかけを作ってもらえる人もいるのかもしれないと考えます。」(地域創造コース)

「人間は、創作の過程で楽しさや喜び、苦悩や挫折など様々な感情を味わい、それらを糧にして自分を成長させることができる。そして芸術活動に取り組むことは、ものづくりの苦しみや葛藤に気がつき、他人の創作活動に対して敬意を持つことにもつながる。創作物を消費する現在の風潮を少しでも改善するためにも、多くの人がこのような活動を行う必要があると思う。」(人間形成コース)

「私は今までの人生がこれでよかったのか、あの時間違っていなかったのかなど思ってしまうことがあります。私だからこそ見えるものを感じるものがあって、できないことにも悲観的にならなくていいといわれているように感じ、気持ちが軽くなりました。みんな違うからこそ生まれる自分らしさをだすことができる場があることはとても貴重だと感じました。」(国際地域文化コース)

「オドルこと」から、生きることと不可分な表現について考え続けている木野の「どんな人の人生も「作品」になる」という強い肯定の言葉が、自分が何者であるかに自信が持ちづらい受講生にとって救いとなったようである。さらに、終盤の質疑の時間に、受講生からのリクエストを受けて、短く木野自身の「オドリ」も披露された。教壇上のわずかなス

ペース上から全身のしなやかな動きで表現されたその舞は、言葉以上の「何か」で講義室を満たしたように感じられた。その「何か」を受講生もそれぞれに受け取ったようである。

(11) 藤縄望さん(鳥取市役所企画推進部文化交流課)

7月12日の第12回講義では、本学部卒業生(国際地域文化コース・柳ゼミ)で、現在は鳥取市役所に勤務する藤縄望さんのお話を伺った。また、藤縄さんの後輩にあたり同じく柳ゼミ生で大学院に在籍中の川上柁尚さんと指導教員の柳静我も登壇した。柳ゼミでは、国境を超えた「東アジア」という地域を縦横無尽に行き来し、そこから「地域」をとらえている。学生からは以下のようなコメントがあった。

「このセクションのテーマである「わたしへの/わたしからの視点」というのは、柳先生が言っておられた、グッとくるを見つけることの繰り返しなのかなと思いました。」(地域創造コース)

「地域は限定されない、明確に何かがあるからそれは地域なんだ。というものは存在しないという感覚を得て、私としての地域の考え方、私だけの地域のとらえ方というものがあるっていいんだという気持ちになり、心の霧が少し晴れたように思いました。」(人間形成コース)

「自分のやりたいことはこれから見つければいいのだ、まだまだこれからなのだと思えるようになった。…学びたい、という気持ちがこの不安な気持ちを上回った時に海外へ行く勇気が出るのかとも思った」(国際地域文化コース)

「私」の視点についての考察とからめ、自分自身にとって「グッとくる」ものや「地域」を見つける、考えていくのだというように、地域に関する問いが自分自身(私)に向かっていることが窺えるコメントである。

(12) 中島諒人さん(演出家・鳥の劇場芸術監督)

7月19日、「私」のセクションの最後となる第13回講義では、前年度もご登壇いただいた中島諒人さん(演出家・鳥の劇場芸術監督)からお話を伺った。今回は、近代的な「私」に悩む主人公が登場する戯曲などを用い、「私」とは何かについて考えさせられる講義となった。受講生からは以下のようなコメン

トがあった。

「私らしさとは何か、私も何者かであるはず、しかし何者でもない...といった悩みは、私自身も例外ではなく抱いている。むしろ私の場合、全日本人平均よりもその悩みが深刻かもしれないということに自覚している。私は高校生になっただけから、急に割り切れない性格になった。演劇におけるドラマツルギーとは少し違うかもしれないが、その時々自分にふさわしい役割を知り、その場にふさわしいように演じることを心掛けても、どうも自分自身の中で「自分って何なんだ?」といったモヤモヤが消えず、コンフリクトに陥ってしまうことが多々ある。ただ、長所も短所も関係なく、今の自分を「らしさ」にしようとの助言をいただいたので、逆にこのような考えすぎる性格も「らしさ」に当てはまるのかもしれないとも思った。この「らしさ」も、自身の適応能力向上のためにアップデートしていかなければならないと思っている。自分のキャラクターは自分で規定するという気持ちで、人とのつながりを通じて刺激ももらいながら、この先の人生を爽りあるものにした。」(地域創造コース)

一方、中島さん自身が「私」として取り組む「鳥の劇場」での活動の紹介を受けて、以下のようなコメントも寄せられた。

「鳥の劇場の話で、自分は小さいときに見に行ったことがあり、小さい頃だったのであまり詳しくは覚えていないけれども、その時は小さなステージで大人たちがのびのびと演技をされており、楽しそうだなというような覚えはある。このような劇場のように何かに取り組み自分や自分の思いを伝えられるような場所がどんどん増えていくような社会が作れたらいいなと感じた。また、最後にアップデートの話がされていたがこれからいろいろな人と関わっていく中でそれぞれの良いところを見つけて、自分の中に取り込んで、もっと人間的に成長出来たらいいなと思いました。」(人間形成コース)

「見ている人に対して自分が幸せだと感じることをダイレクトに伝える。自分と相手の接続によりその相手に何かしらの助言の効果であったりするものが届く。これは自分の考えの中にはなかった新しい地域貢献の形だと思う。…自分の位置づけと

社会の中の自分の位置づけというものが一致しなくてもいいのだと今回聞いていて感じた。またこれから自分が社会に出て何かに行き詰った時は今回のような劇場などに足を運んでみようかなと思った。」(国際地域文化コース)

「演劇」とその拠点である「劇場」自体が、「私」と地域や社会との結節点となっていることを感じさせる講義でもあった。

(13)堀西雅亮さん(島根県外国人地域サポーター)
事情により一旦休講とした堀西雅亮さんの講義について、日程を変更して7月26日の第14回として実施した。堀西さんは、他県でのご経験を経て、現在は島根県外国人地域サポーターとして活動されている。講義では、耳あたりのよい「多文化共生」が広く行き渡った日本で、差別的な対応に戸惑う「外国人」の切実な声が紹介された。これを受け、受講生からは以下のようなコメントがあった。

「現在の日本は多文化共生社会であり、より外国人が日本で過ごしやすくなるような取り組みをしている。人々はその取り組みを称賛するが、その取り組みを行うことによるその対象の人々が抱える問題というものを見ていない。」(国際地域文化コース)

「この授業を通して気付いたことは、多文化共生は永遠に進化するプロセスであり、私たちが地域の多様性を受け入れ、その中で成長していくことが重要だということです。」(地域創造コース)

「相手の国籍、生まれ、育ちに関わらず、自分との違いにも違和感を感じないことが、一番人を平等にみて尊重することができているということなのではないかと以前から考えていたが、それをするのはほぼ不可能であるということも感じてきていた。だがその場合、本当に誰も傷つけず排除されない場所をつくることなんてできるのか、つくるにはどうしたらいいのかとわからないことが多すぎて悩んでいた。しかし、今日の堀西さんのお話で「支援される苦しさ、支援が必要になってしまう環境について見つめ、それをどう変えていくのか考える」という言葉を聞き、私の中に、人を変えるのは難しくても環境から整えれば人の心もついてくるのではないかと新しい視点が生まれた。」(人間形成コース)

堀西さんの問題提起を受け止めたくて思考を巡らせ、隘路を脱しようとする姿勢が頼もしい。

以上、各回の受講生コメントを通じて授業を振り返ってきた。濃淡はあるものの、各セクションのテーマや5つの視点を補助線としつつ、各講師の言葉を真摯に受け止め、思考を深めていることが窺える。

Ⅲ コース担当教員による振り返り

1 絶対性と相対性の対立を超えた先にある思考を探究する地域学入門

(地域創造コース・菰田レエ也)

地域学入門の省察をした昨年度の原稿では、多元的宇宙観に支えられた地域学の中で、個別の私的文脈から議論を立ち上げる易しさと難しさに触れた。また、学生や教員にとっての地域学「入門」という場合は、初めて知る現実や様々な考え方を五月雨に浴びる中で、凝り固まった自分自身への位置づけを再考する未知への扉を開く機会でもあった。今年度も受講生がそれぞれ新たな扉を発見したことを確認してきたが、一連の過程をくぐった学生達は、その先へ向かってどのような思考を練り上げつつあるのだろうか。ここではその可能性を探るため、期末レポートと小テストの内容を分析素材に、彼ら彼女らによる思考の到達点を解釈してみたい。なお、2022年度から2023年度に至るまで地域創造コースの担当をした著者なりの整理であり、網羅性という点で限界がある事はあらかじめ付記しておく。

第一に、多くの学生たちが二分割思考からの脱却に辿り着いていた。二分割思考とは、物事を白か黒か、全か無かなど物事に中間を認めずに世界を分類する思考様式で、「絶対に・・・でない」あるいは「絶対に・・・である」という形で議論の決着をつけやすい反面、極端な位置づけを生みやすい。「私は絶対にマイノリティへの加害者ではない」、「表現の仕方は文字言語しかない」、「定住する人が通常で移動する人が異常である」など具体例を挙げればキリがないが、講義内容を通して、各自が暗黙のうちに位置づけていた極端な準拠枠がある時点から突き崩されていた。自らの位置づけの前提を再考した学生の存在が伺える。

第二に、再帰的思考から次の一步を踏み出そうとしていた。ここでの再帰的思考とは、未知の部分の存在を前提にして、自己の行動や思考等の学習行為の結果から、必要に応じて自らを修正していく反省的営みを指す。二分割思考を脱却した世界観では、白と黒が混じり合うグレーゾーンの可能性の中で自

らの立論を迫られることになる。絶対性から開放されたもう一つの世界は相対性である。こちらの寄り辺なき世界に過剰適応すると、絶え間ない不安に苛まれ時として絶望する一部の人は、厭世的な思考と思考放棄に陥る場合がある。だが、地域学のポイントはこちらの極に完全立脚することでもない。絶対的な準拠棒が揺らぐ瞬間は自らの心の支えを失う寄り辺なき感覚に似ており、覆るリスクを前提に自らの軸を新たに構築・加工・編集する探究行為は、自らを傷つきやすい立場に晒しながら、一步踏み出す勇気を求められるものである。関連する立論姿勢に着地してみた学生の言葉を拝借すれば、「何故だろうか、とあらゆる物事に対して疑問を持つ」など日々心がけている何らかの探索的な営みから「自分にとってグッとくるものを見つける」ことを大事にしつつ、「自分以外の人やその地域で暮らす人々」の気持ちや考え方の違いを理解する努力を通して「私の主観や偏見に囚われないアイデア」の余白が潜在的にはあると考える。重要なのは、こうした営みは「納得できないまま終わる」かもしれないことを受け入れることであり、「この納得できない、という感情を得ることも自分が主体的に学ぶことの第一歩となる」ということであろう。

最後に、上記2点の帰結として、思考の複線化に辿り着いていた。ある物事を一つの軸から解釈していただくだけではなく、様々な軸を組み合わせながら解釈していきこうとする立論姿勢が見受けられた。具体的には、「時間や人とのつながりの中に自分を位置づけることが重要なのだろう」という学生のように、自らを埋め込む社会的紐帯や他者との関連性という軸に過去から現在に至るまでの時間軸をかけ合わせることで、流動的に生成変化する過程として自分自身を捉え直そうとした思索が一つの例である。抽象的には、別の学生が理解しているように「一元的な立場を知って問題を捉える」のではなく、「他の立場に立って見えてくることはないだろうか」と思索を膨らませ続ける姿勢が大事になるということだ。

以上、地域学入門という入口を経て、思考様式の多元化が学生にもたらされたのではないと思われる。今後、こうした思考様式がより具体的な実践感覚に基づいて展開されていくことを学生には期待したい。最後に、次年度以降の地域学入門も、様々なテーマや他者と自らとの関わりを右往左往しながら考察してもらい、各自の思考形態自体が練り上げられ、独特の宇宙観が生成されていく発端となることを祈念し、本稿を閉じることとしたい。

2 国際地域文化コース学生にとっての「地域学」 —最終レポートを通して—

(国際地域文化コース担当：杉村藍)

ここでは、国際地域文化コースの学生の最終レポートを通して、彼らの「地域学」への認識がどのように変化しまた深まっていったのかを、特に言及が目立った「地域」「多文化共生」「私」という3つをキーワードに、実際に彼らが書いた文章を交えつつ報告する。

(1) 「地域」とは何か

ある学生の「私は地域学が、何を学ぶ学問なのか正直分かっていなかった。(中略)もともと『自分の地域のことを学ぶ』という、とても限られた範囲の学問なのかと思っていた」という言葉が示すように、地域学部を志望して入学しているものの、ほとんどの学生にとって「地域学」は大学で初めて出会う学問であった。「地域」とは、「地域学」とは何かを探求するプロセスそのものが「地域学入門」という授業であったといえる。

探求の過程で導き出されるものが画一的な「正解」ではない点もこの授業の大きな特徴である。別な学生の「講師の方々の地域のとらえ方、地域とのかかわり方が自分の中に蓄積されていくにつれて、私にとっての地域とは何だろうと考える時間が増えてきた」という記述にもあるように、多くの学生は、誰にでも当てはまる汎用的な「地域」でなく、自分自身を基軸として「地域」「地域学」と向き合おうとしていた。

そのため、最終レポートでは「地域」「地域学」に対する多様な捉え方が示された。ここではそのうち2つを紹介する。1つは「人生の中で住んでいる地域、仕事で活動する地域など、人は何個も地域を持っていて様々な地域の中で生きていくのではないかと思います」というもので、受講当初は「地域」を自分の生まれ育った場所や住んでいる場所といった特定の一か所と考えていたものが、もっと広がりのあるものとして捉えるようになったようである。またもう1つは「生きていれば生きていてだけ自分にとっての地域の範囲や考え方が変わっていき、広がったり狭くなったりするもので私にとっての地域とは簡単には表せないものだと考えました」というものである。「地域」を空間としてだけでなく、自分の認識とともに変化し得るという、時間的な側面からも「地域」を見つめている。

(2) 多文化共生

「グローバルな文化と地域」を「学びの柱」の1つとする本コースでは、国際交流や海外留学に関心

の高い学生が多い。そのため、講師の方々の海外での経験談には強い興味を示していた。また、島根県外国人地域サポーター、堀西雅亮氏の「出雲と移民一足元から考える多文化共生」も印象深かったようである。「授業を通して地域の中でつながるのは決して日本人同士だけではなく、外国人や外国にルーツのある人も含むということと、地域について考えるのなら多文化共生もあわせて考える必要があることが分かった」と地域と多文化共生の関わりに気づいたという意見が多く見られた。

また、「身近に留学生の友人ができたことも大きいと思う。彼らのために何ができるか。地域学入門の講義を聞いてそのこと（多文化共生）についてより意識をするようになった。（中略）鳥取県への移住者として、できるだけ同じ目線で彼らの悩みを解決することが、この講義を通して私の目標となった」と、自らも大学進学を期に鳥取県という新しい「地域」で生活を始めた経験を基に、多文化共生に向けた自分なりの目標を掲げた学生もいた。

(3) 「私」として生きる

今年度の授業は「生活」「移動と歴史」「私」という3つのカテゴリで構成されていたが、最後の「私」はアイデンティティを確立しようと自己探求をしている学生たちにとって、日々向き合っているテーマでもあったようである。「15回の講義を通して、（「地域学」とは）自分がしたいことから「地域」と繋がることを探すことであると感じた。（中略）地域という不特定でありながらも特定の範囲の中で、自分の武器を以て人と関わっていく様々な形を講師の方々から吸収できた」と、自分の好きなことや強みを地域と繋がるツールにしようと考えた学生や、「私だけの地域の捉え方があってもいいのだという考えが生まれ、以前は自分の意見が他の人の意見とずれている内容だと恥ずかしいと思っていたが、自分の考えが誰かの新しい知見を生むかもしれないとポジティブに考え、自分の意見を積極的に伝えていきたいと思った」と、まずは自分自身を肯定して受け止め、そうした自分だからこそできる「地域」の捉え方があるという気づきを書いた学生もいた。

半期間という限られた時間ではあったが、学生たちはそれぞれに「地域学」と向き合い、自分なりの答えを探していた。彼らの「地域学」への旅は2年次の「地域調査プロジェクト」、3年次の「地域学総説AB」へと続く。これらの授業を通して学外で多様な「地域」に直に触れる機会もあるだろう。これからも、新たな学びを通して自分なりの「地域学」を深めていってほしい。

3 地域学教育の経験

（人間形成コース・呉永鎬）

2023年度地域学入門のサブコーディネーターおよび人間形成コースのコース担当教員を担った者として、鳥取大学における地域学の教育について、そのわずかな経験をまとめてみたい（以下、地域学と記す際は「鳥取大学における地域学」を指す）。前項の菰田先生、杉村先生のように最終レポートを用いて人間形成コースの学生の学びの質を考察することも可能だが、レポートよりも毎回のコメントペーパーの方がよく書けていることから、その実相の素描はⅡに譲り（学期末に多くのレポートが課されていたり、そもそもレポートの書き方がわからないといったことが影響しているのかもしれない）、ここでは授業のつくり方について考えることとする。

地域学を教える、伝える、また地域学をとおして／について考える契機を学生に与えるための方法という意味で、「地域学の教育」という用語を用いる。言うまでもなくコメントペーパーやレポート、発表等をとおして教員の側が学生から学ぶことは極めて多く、授業という場に限ってもそれらも含めた双方向的な作用の連続の中で地域学それ自体は彫琢されていくものであるが、ここでは「教える」ことの経験に焦点化したい。授業「地域学入門」の内容と構成は、鳥取大学におけるこれまでの地域学に関する研究や議論、試行錯誤、外部講師をはじめとした様々な人々との関係性等のさしあたりの一つの到達点として（毎年度）顕現するが、それと同時にこの授業が地域学部1年生が必修で受ける授業でもあり、どのように教えるかというペダゴジックな反省もまた必須であると考えためである。地域学の問いや対象、方法等、研究としての地域学を考究していくとともに、地域学をどのように教え伝えていけるか、どのような地域学教育が学生たちにより意味あるものとなるのか。こうした地域学の教育の経験を蓄積していくこともまた、地域学部の教員として求められることだろう。ここでは地域学の教育の一つである授業「地域学入門」での経験をもとに論じる。

Iでも確認されたように、2023年の地域学入門は、柳原ほか編（2011）および柳原（2017）で示された地域学の5つの視点を軸に授業計画を構成した。すなわち、大きく①「生活から考える視点」、②「移動の視点」「歴史の視点」、③「わたしへの／わたしからの視点」の3つのセクションを設け、各セクションの最後には本学教員から各視点について深めていくための話題提供とともに「客観的・構造的視点」についての補足をお願いした。昨年度授業の反省に

基づいてこのように構成された2023年度の授業は、学生および関係教員にも概ね好評を得た。Ⅱで示された学生たちのコメントからも、学生たちの地域学に対する理解や考察が、回を追うごとに深まっていく様が見て取れるだろう。この点はコース担当教員の共通した評価でもあった。

本年度の「地域学入門」を構成・実施していくうえで重要だったことを、これからの授業計画を展望しつつ、4点示したい——以下の諸点はいずれもあまりに自明なことであるが、私のように不文律に戸惑うような経験を今後できるだけ繰り返さないためにも、また継承とさらなる発展への願いを込めて記しておくことをご容赦いただきたい。

第一に、地域学部の教員たちによって、地域学の研究が蓄積され、地域学が深められてきたことである。柳原邦光氏を中心に『地域学論集』にまとめられてきた地域学に関する論考、授業「地域学入門」ならびに「地域学総説」に関する報告、そして前掲の『地域学入門』（2011年）はその最たるものである。他の学問の教育と同じく、こうした研究の蓄積は教育を行っていくうえでの基盤となる。地域学の教育を担当するにあたり、教員たちは（おそらく「地域学」を研究してきた教員は稀であろうからなおさら）可能な限りこうした地域学研究の蓄積に目を通しておく必要がある。また、研究は絶え間なく更新され続けていくものでもある。仮に地域学に関する新たな書籍が刊行されるのだとすれば、それは地域学研究の継承と発展を意味するばかりでなく、結果として授業の質へと還元されていくことだろう。

第二に、地域学研究会幹事会および例会との連動である。「地域学入門」の授業を構想し始めるのは前年度の9～10月頃からである。2022年度の幹事会は、事務的な報告に時間を割くことを極力避け、幹事たちが地域学や関連授業について建設的に議論する時間を設けるよう努めた。また、2022年度の例会では、『地域学入門』の講読（6月）、先述した柳原氏の諸論考の講読（7月）、柳原氏による講演（10月）等、教員たちが集団で地域学について学び、理解を深めるための場を積極的に設けた。竹川俊夫教授（1月）および竹田伸也教授（2月）の報告も、地域社会や人々のつながりのあり方について多くの示唆を与えるものであった。このように幹事会および例会のあり方を、地域学を深めていくことに焦点化したこと（脱事務報告の場、脱慣例）は、担当教員たちの意識を高め、授業の構成や内容ばかりでなく、コメントの選定やコメントへのリプライといった授業実践も含め、授業に好影響を与えることになった。授業

一例会一幹事会が有機的に連動し機能していくことが肝要であると言い換えることもできよう。

第三に、これまでの授業経験の継承である。初年次教育を想定している「地域学入門」は、理論的な考究を軽視しているわけではないが、まずは何らかの形で地域に関わっている現場の方々の実践を知ることには重きを置いている。そうした授業の性質上、おおよそ2/3の授業は外部講師による講演という形式となる。したがって、外部講師をどのように選び、どのようなお話をしていただくか、どのように配列するのが授業を実施するうえでのポイントとなる。このことを考えていくうえで何よりも重要であったのは、前年度までの経験を引き継げる者が、授業計画を立案するメンバー内（幹事会メンバーではない）にいるということであった。数年来付き合い合ってきた方々との間に築かれた関係性、お話いただいた内容と学生たちのリアクション、また計画通りにいかなかった失敗談等々、これまでの授業経験の反省と継承なくして、これからの授業を構想することはほとんど不可能である。授業計画立案メンバーに、相当の年数を地域学研究会幹事会として真摯に関わってきた教員（今年度の場合は竹内潔先生）がいてこそ、閃きや遊び心に基づく人選にも、人間関係やバランスを考慮したうえで対応できる。これまでの「地域学入門」を担ってこられた諸先生方の経験と文脈の上に、次なる「地域学入門」を置くという意識が重要になるだろう。

第四に、「地域学入門」のコーディネーター、サブコーディネーター、コース担当教員が、本授業に真摯に向き合うことである。これもまた当然のことではあるものの、本授業の形式がかなり特殊であり、とりわけ登壇するわけでもないコース担当教員は、授業へ向き合う真摯さや責任感が相対的に低くなりがちである。しかし本年度の担当者はそうではなかった。これは偶然ではあるが、本年度の担当教員が全員前年度にも「地域学入門」に関わっていたことの影響が大きいかもかもしれない。コーディネーター、サブコーディネーター、コース担当教員全員が、すでに「地域学入門」の大まかな流れについて把握できていたため、関わりの質が上がったとも考えられる。当然2022年度の反省に基づく2023年度の授業構想の速さと質も、著しく高いものであった。地域学研究会に多くの教員に関わっていただきたいという研究会の意向との兼ね合いはあるものの、関わる教員を2年程度固定するという人員配置が授業（地域学教育）の質を高めることにつながっていく面もあるだろう。

以上で示した4つの相互に関連しあう経験を吟味・再考し続けることが、地域学教育の質を向上させていくことにつながっていくと考える。私自身、引き続き地域学の研究に向き合うとともに、地域学の教育のあり方について、考え続けていきたい。

IV. おわりに

(コーディネーター：竹内潔)

以上、2023年度前期の地域学入門の実践を振り返ってきた。

はじめに(竹内)及びⅢ-3(呉)で言及しているとおり、今年度の授業は、これまでの「地域学」をめぐる先人の蓄積と到達点、中でも特に「5つの視点」を強く意識し、これを3つのセクションに再構成したうえで、セクションごとに学内教員による客観的・構造的視点からの補足を試みた。

結果として、学生のコメントでも「〇〇の視点」を直接用いるものや、その語は用いずともそれを意識したことがわかる考察が多数みられた。茫漠たる「地域」という概念と、その「地域」を生きる講師たちの振る舞いとらえるうえで、ある「視点」を解釈の手がかりにして言語化を試みることで腑に落ちる理解が可能になったのではないだろうか。その意味で、このような「型」による授業構成は有効であったと言えそうだ。

一方で、そのような理解は、対象の一部だけを切り取ったにすぎないにもかかわらず、全体がわかったつもりになってしまう危険性もある。だからこそ、1つの視点ではなく、5つの視点という複眼的な見方を提示しているのであり、なんらかの形・視点で統合されることが必要だろう。

昨年度の「いのち」から考えるというテーマ設定は、そのような統合の試みであったと言える。5つの視点による分析的考察と「いのち」を軸とする統合を、1年次の「地域学入門」のみで扱えるのかは、今後の授業計画立案における課題となろう。いずれにしても、このような分析と統合の往還によって「地域」の理解の解像度を上げていくことが、「地域学」をするということなのかもしれない。この点は、3年次の「地域学総説」を含めた4年間のカリキュラムの中でも考えていくべきであろう。

また、今回の授業計画の中では、地域を考える上で重要な要素である自然環境や、私たちの生活を脅かし、人類的な課題となっている公害問題・地球環境問題や戦争といったテーマを十分に取り上げることができなかった。これも、15回という限られた回数の中で適切に配置するのは困難が伴うが、講師選

定の際に留意すべき点としてここに記しておきたい。

なお、以上の授業の運営を円滑に実施するため、関係教員の協力は欠かせない。コーディネーター・サブコーディネーターが全体の調整や進行上の舵取りをしていくが、学生との直接のやりとりや成績評価はコース担当教員が担う。そして、講師招聘に当たっては、懇意にする教員に協力を仰ぐ場合がある。このうち特にコース担当教員の負担は大きい。昨年度は毎週の学生の小テスト回答のピックアップの際にコース担当教員としてのコメントを付していたが、コーディネーターがフィードバックする際にコメントを述べることから重複感もあり、今回はこれを省略し、負担の軽減を図った。

「学際」「超学際」の学問としての「地域学」は、より多くの人の視点が重なることによって解像度が上がっていく。そう考えると、学内教員等がその専門性を活かして無理なく継続的に「地域学」をすることができるようにしつつ、引き続き学外の実践者の招聘にも心をくわいていくという姿勢も必要だろう。

本稿が「地域学」のこの先を進む上での一つの道標となれば幸いである。

注

- 1 「地域学入門」は、学部1年次の必修科目として位置づけられ、3年次必修の「地域学総説」と並ぶ地域学部の教育課程上の基幹科目の一つ。これらの授業は、地域学部教員らで組織する地域学研究会幹事会が中心となって授業計画の立案・実施に当たっている。兩科目に関する記録や到達点に関しては、逐次、本誌上でも取り上げられており、それらの論稿の一覧を前稿の末尾に掲載している。

参考文献

- 柳原邦光(2017a)「地域学への招待」『地域学論集』, 14(1), pp. 203-214
- 柳原邦光(2017b)「地域学講義」『地域学論集』, 14(1), pp. 215-233
- 柳原邦光・光多長温・家中茂・仲野誠編著(2011)『地域学入門——〈つながり〉をとりもどす』ミネルヴァ書房
- 竹内潔・呉永鎬・菰田レエ也・田中大介・杉村藍(2023)「『いのち』から考える地域学—2022年度『地域学入門』における試み—」『地域学論集』, 20(1), pp. 91-108

